

ローマ人への手紙⑧ 第7章 律法からの解放

それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。しかし、罪はこの戒めによって機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。それは、戒めによって機会を捕えた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。す

なわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

1. 律法主義とはどういうものか

7章は、律法からの解放というテーマです。

そもそも律法というのはどういうものなのか、日本人にはわかりにくい。まして、なぜ解放が必要なのか、聖書を読んだだけでは何がなんだか分からないことが書いてありますね。イスラエル民族は律法を持ち、律法を何よりも自慢しているのですが、私達は律法を持っていません。だから律法に対して温度差がある。私たちにはなかなか理解できないし、理解しても実感できないというところかもしれません。

12節から読んでいきます。「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」律法自体は聖なるもの、神様が与えたものという意味です。律法と言うのは、聖なるものであり、正しく、また良いものです。「では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。」パウロは、律法は良いものである。これを守りたい。これを行いたいと願っています。律法は良いものだ。私は良い行いをしたいのだ、と。

「ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、

からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

律法主義ということばを説明するのは、とても難しいです。教会では律法主義ということばを使いますが、世の中でそのようなことばを使うことはありません。そのことばのもつ意味、パワーというものは、実際にはなかなか実感できないものであると思います。

まず、イスラエルの人は、律法を持っている事が何よりも自慢だったのです。律法を持っていることが、どうしてそんなに自慢なのか、そんなに誇りに思うのか、そういう感覚はわかりませんね。

彼らは、自分たちが神から選ばれた選民であると意識しています。「なぜ、神がわれわれを選んで、われわれだけに律法を与えたのか。それは、われわれだけが律法を全うすることができるからである。異邦人たちは、律法を行うことができない。私たちだけが律法を守る能力があるのだ。」

そのように、彼らは優越感を持って、回りの国々をバカにして、批判して、まわりの国々からは風変りな人々と呼ばれました。そして、イスラエルという国は、軍事的にも、経済的にも力のない国であったのに、ローマ帝国も、大変手を焼いたのです。ユダヤ人はしばしば謀反を起こしたからです。ローマの属国になっても、「われわれは律法を持っている民だ」と意識して、誇りを持っていました。

私がデュークという大学に通っていた時、友達がユダヤ人の家にバイトをしていました。安息日というのは、アメリカでは金曜日の夕方6時から始まって、土曜日の夕方6時に終わります。友達がどういう仕事をしていたかという、安息日に暗くなったらあるお宅に行って、電気をつけることだったのです。そして夜になったらまた行って、電気を消す。料理をしたり、お茶を沸かすために、火をつける。そんな簡単な仕事です。それでアルバイトになっていたのです。

ユダヤ人たちは安息日を守ります。安息日に働かない。火をつけるのは、安息日にしてはならない労働であった。あかりをつけるということを、安息日にはしてはいけない。ですから、電気のスイッチを押すことは、安息日律法を破ることであるというわけですが、そのように安息日律法を自分たちでつくって、自分たちで守るということを、イエス様の時代から2000年たった今日でも、熱心に行っている人たちがたくさんいるのです。今、アメリカに住むユダヤ人は、そこまでいかない人もたくさんいますが。

わずらわしいだろうなと思います。他人が家の中に入って来て、スイッチを入れたり、消したり。でも、彼らは厳格にそういうことを守っているのです。こういうことを日本人にわかってくれって言ったって、「そんなことに何か意味があるのか。なんでそんなばかばかしいことをするんだ。経済的にも無駄だし」、と批判するだけで、彼らの律法に対する熱心さ、律法に対する誇りというのは、わからない。「どうしてそこまでやらなければ

いけないの。不便でしょうがないでしょう」みたいに思う。ですから、われわれは律法主義とはどういうものかは、正直言って理解できないのです。

イエス様から 2000 年経った今日でも、エルサレムのホテルには「シャバットエレベーター」というものがある。9階に行こうとしても、1階で止まり、2階、3階、4階、5階、6階、7階、8階に止まって、やっと9階が来る。どうしてそのような仕組みかというと、安息日にエレベーターのボタンを押さなくてもいいように工夫されているからです。自動的に毎回毎回止まるから、ボタンを押す仕事をしなくていいのです。

シャバットファウンテンというものもあります。ボタンやペダルを押すと水が出てくる給水機のことですが、シャバットファウンテンは、絶えず絶えず、お水が出ています。ボタンを押さなくても水が飲めるようになっているのです。

皆さん、「本当かよ」と思うでしょう。でも、私は何回もエルサレムに行きましたが、どこのホテルでもシャバットエレベーターです。これをわれわれ日本人が理解する事は無理です。批判してしまうわけです。しかし、彼らは今日ですらそのようにして律法を重んじ、律法を大切にしているわけですから、2000年前のイスラエルにおいては、どれほど律法を守ろうと努力したことだろうと思うのです。

2. 日本における律法主義

律法主義を日本的に説明するには、どうしたらいいでしょう。日本人は律法を持っていないので、感覚的にわからない。でも、もし、日本的に説明するならば、「頑張れば幸福になる」というのが日本の宗教ですね。「努力すれば成功する」「勤勉であれば幸福になる」「努力した人が勝つ」「だれよりも、努力した人がいい人なんだ」という考え方です。これが、無意識のうちに、日本人の中に律法主義的なものをつくっていると思います。

「頑張れば、きっとできるよ」。こういうことばの正統性について、だれも吟味しません。日本においては「頑張る」というのは絶対善であり、それに対して疑いを持つことは赦されないのです。

「頑張る」というのは、もう宗教です。「頑張らなければいけない」「頑張らなさい」というのが家庭教育であり、学校教育であり、会社に入れば、「とにかく頑張れよ」という文化ですね。だから、「本当に頑張った人が幸福なのか」という疑問のことばを日本人は一切持ちません。「不幸になったのは、頑張らなかったからだ。」「頑張らなさいすれば、幸福になった」「もっと頑張れば、もっと幸福になるだろうに、頑張らなかったから不幸になったんだ」こういう感じではないでしょうか。

私が「頑張らなくてもいい方法があるんだよ」と言えば、みんな混乱して、「努力しなくてもいい道があるんだよ」と言うと、大混乱になってしまう。なぜなら、日本人が絶対善と思っていることを、「そういう生き方ではない。ほかの生き方があるよ」と言っても、日本人は感覚的に、絶対善である頑張るというものがしみついているので、なかなか理解できないのだと思います。

先週のジュビリーで一人の若い姉妹があかししてくれました。電車の中で、ある母親が小学校5年生くらいの女の子に「この次の試験は死ぬつもりでやるのよ、死ぬ覚悟でやりなさいね」と大勢の人が聞いている中で、何の感覚もなくそういうことを言っていたのだそうです。回りの人は「立派なお母さんだな、素晴らしいお母さんだな」と思ったのでしょうか。勉強することを死と関係づけて、「死ぬ覚悟で、死ぬつもりで勉強する」と言う。これはアメリカに長い間いた私には、全く理解できないことです。どうして勉強するのに「死ぬ覚悟」ということばを使うのだろう。

私はキリストのためにも、「死ぬ覚悟」ということばを使うのは嫌いです。「私はキリストのために死ぬ覚悟ができています」とは言えるかもしれませんが、でも、今日の日本では、実際キリストのために死ぬことってあり得ません。死ぬことは絶対ないから、だれでも「死ぬ覚悟」って言えますよね。迫害時代、捕われて殺されるような時に「私はキリストのために死ぬ覚悟で従います」というのは納得できることばですが、絶対死なないところでそんなことを言っても、何か、非現実的です。格好いいかもしれないけれど、内容がないことばです。

そういうわけで、小学校5年生くらいの子どもに、「死ぬ覚悟で勉強するのよ」と言う。そして回りの人はそれを聞いても、違和感をもたない。親はともかく「頑張りなさい」「勉強しなさい」「よい高校に入りなさい」「よい大学に入りなさい」最近では「よい小学校に、よい幼稚園に入りなさい」という世界になりました。親の気持ちはよくわかります。子どもの幸福を願って、よい成績をとって、よい学校に入って、よい企業に入って、できたら部長さんくらいになったらいいな、と思う。

日本で親が自分の子どもになって欲しいと思うのは、まず、高級官僚、国家公務員になることだそうです。国家公務員になるために「勉強しなさい、勉強しなさい」と言う。

家では「頑張りなさい」と親は言っているし、学校でも頑張りなさいと先生は言っているし、会社に入れば、頑張りなさい、頑張りなさい、ハイ、頑張りなさいということばで収まる。

しかし、本当に、頑張ることが人の幸福につながるのでしょうか。

男の人は、頑張るよりも、時には奥さんとゆっくり時間を過ごすことが必要かもしれません。子どもとキャッチボールしたり、一緒に絵を描いたり、ディズニーランドに行ったり、公園に行ったり、遊んだり、子どもと共通のことをするのはいいことだと思います。

英国の女性が書いたハリーポッターが、アメリカで爆発的に売れました。どのように用いられたかと言うと、父親が子どもに読み聞かせるということが起こったのです。物語を子どもに読み聞かせるということは、アメリカの文化の中で暫く停滞していたのですが、ハリーポッターをきっかけに復活しました。でも、日本では父親が子どもに本を読んであげると言うことは、なかなかありませんね。

もともと本というのは、自分で読むよりも、誰かがお話ししてくれるのを聞くものです。本当は、聞いたほうが面白い。耳は外に現われた脳と言いますから、ことばによって耳からたくさん刺激が脳に伝わって、ハリーポッターの世界がどんどん思い浮かんでくるの

です。しかし、ハリーポッターが面白いからって、日本で父親が子どもに朗読してあげるということは聞いたことがありません。時には、子どもが勉強をやめて、父親が仕事をやめて、ハリーポッター、分厚い本で7巻あり、どんなに時間がかかるかわかりませんが、朗読する。そういう時間を持つことは大切ではないかなと思うのです。

「でも、そんなこと言ったら、どうやっていい中学校に入るの?」「どうやって大学に入るんですか。」「物語を話したり、聞いたりして、役に立つんですか?」って思うかもしれません。そういう発想は、いい中学校に、いい高校に、いい大学に入るという非常に一面的な価値観の中での発想です。

しかし、ほとんどの人が疑いを持たないで、その道に進んでいます。問題は、成功率が少ないことです。落ちこぼれがたくさん出てくる文化なのです。頑張ったって、生まれつき頭のよい人や、優秀な賜物を持っている人には勝てない。日本人は頑張れば勝てると思っていますが、そうでしょうか。

アメリカ人は日本の野球を笑います。日本人は頑張ればプロの選手になれると思うし、頑張ればもっとヒットが打てると思っているし、頑張ればもっといいピッチャーになれると思っている。でも、アメリカ人は「そんなことありえないよ」と笑うのです。頑張っても、プロの選手にはなれないよ。才能がなければできないんだよ、と。

日本のベースボールは、「今年いい成績をあげたから、来年はもっと頑張って、もっといい成績をあげよう」と言います。アメリカ人は「毎年毎年頑張って成績を上げるなんて、無理だ」と思っています。いい時があり、悪い時があり、またいい時がある。それでいい。それでプロでいい、というのがアメリカの考え方です。毎年、毎年、進歩しなければならないというのは日本人の考え方です。頑張ればできる、と私たちは思い込んでいる。しかし、この頑張りのために親子関係が犠牲になり、豊かな、ゆっくりした、楽しい時間を失ってしまいます。

日本ではコンピューターゲームが盛んですが、アメリカの家庭では、ボードゲームが盛んです。単純なゲームで、家族がそろって、2~3時間かけて遊びます。また、アメリカではパズルが流行っていて、家族中で1万ピースのパズルに取り組んでいるような光景をたくさん見ます。そういうことをしては、いい大学には入れないかもしれませんが。

頑張る事が悪いと言っているわけではありません。でも、本当に頑張れば幸せになるという法則があるのか、吟味しなければいけないと思うのです。

3 律法と頑張ること

頑張ることと律法とは非常に似ています。

第一番目に、一面的であることです。よい大学にはいることに価値があるという考え方、一面的な考え方が支配しているのです。いい大学に入ろうと、みんな頑張っている。本人が頑張らなくても、親が頑張っている。親は勉強しなくてもいいのですが、「勉強しなさ

い、勉強しなさい」と言って努力しているのです。日本人が一斉に、よい大学に入るためにと行って動いているのです。

律法も同じです。律法は人格を無視し、その人の賜物や個性を無視します。日本もそうです。「私、絵を描きたいんです」「そんなことではいい小学校に入れないよ」「私、歌が好きで」「そんなことではいい中学校に入れないよ」となります。律法もそうですね。

「この靴はいい靴だよ。この靴をはきなさい」「お母さん、無理よ。私の足には大きすぎるから」「いいの。みんなこれ履いてるんだから。みんないいって言ってるのよ。みんなと同じにするの。みんなこれを履くべきなのよ」これはおかしい話ですが、律法とか、受験とかは、そんな感じがするのです。子どもの足が小さいとか、女性の足であるとか、幅が広いとか、長すぎるとかでも、「いいのよ。みんな履いてるんだから」。

律法というのは、あなたの個性に関係なく、男であろうと、女であろうと、老人であろうと、子どもであろうと、みんなやらなければいけない。「とにかく履きなさい」、これが律法です。

第二番目に、律法は自分の努力ですということ。どうして努力してはいけないのか、それは説明するのが難しい。自分の力で努力する。自分の力でやる。努力して、自分の力を、神様と人から認められたい。律法は、そういう欲求で人を動かします。

日本でも、努力して社会から認められたい。人々からほめられたいと、努力することが多いと思います。同じ努力でも、夢中になっていつのまにか努力しているというのなら違うかなと思うのですが。音楽が好きで、夢中になって練習する。数学が好きで、夢中になって問題を解く。そういう努力はすばらしいですね。でも、人から認められるために、成績をあげるために、いい大学に入るために努力するのは多くの子供にとって苦痛ではないでしょうか。

勉強そのものが、本当は面白いはず。数学が好きな人は、数学が面白い。文学が好きな人は国語が面白い。古典は面白い。英語は面白い。

でも日本人は、面白い事だけやっていたのでは入学できないと思って、嫌いな科目を勉強する。英語ができるけど、数学ができないと、何とかしてよくできない数学を平均にしようと勉強する。でも、できないものをどんなに頑張っても、よくできる人にはかなわないのです。英語がよくできるなら、英語が好きなものだから、勉強に夢中になって英語がどんどん身につく世界が生まれるのですが、そんな事言ったら受験できないと言います。

そのように、律法というのは、その人の賜物や個性を無視して、一つの靴をみんなにはかせようとするものなのです。

ただ、律法というのはここに書いてあるように、聖なるものであり、よいもので、正しい。日本の宗教においては、頑張る事はよいことであり、正しいことだ。ですから、イスラエル人が律法に対して何の疑いも持たなかったように、日本人は頑張る事に対して何の疑いも持ちません。頑張って、勝った。頑張らなかった人は負けた。落ちこぼれなんだ。それが日本人の精神性と、イスラエル人が律法を行うことが少し似ているかなと思います。

4. 律法が死をもたらす

ここにおいてパウロは、この聖なるものであり、正しい、よいものである律法が、パウロを殺しにかかった。そしてパウロは死んだというのです。では良いものである律法が死をもたらしたのか。いや、絶対そうではない。それはむしろ罪だ。罪はこのよいもの、律法をつかって死をもたらすことによって、罪として明らかにされたのだと言います。

パウロはここで死んでしまった。戒めによって殺されたのだと 11 節に書いてあります。「私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。それは、戒めによって機会を捕えた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。」律法が私を殺したのだと言うのですね。

三種類の死があります。

第一番目に霊的な死。これは神様と私たちが切り離されてしまうことです。罪を犯した時に、神様から切り離されてしまうということです。

第二番目に肉体の死です。これはからだとたましいが切り離されてしまうことです。

第三番目に心の死、精神的な死です。

ここにはカウンセリングを勉強された方が何人かいます。カウンセリングが扱うのは心ですね。心の死。心が死んでしまう。パウロは肉体が死んだとは言っていないし、キリストを信じたら霊的に死んでいるわけでもありませんから、彼が言ったのは心の死、精神の死です。心が硬くなり、冷たくなる。肉体の死も同じように体温を失い、こんなに柔軟なからだですが、死んだら全く硬直してしまいますね。

心の死も同じように、無感覚になります。「嬉しいの?」「別に」。「悲しいの?」「別に」。「喜んでるの?」「別に」。「何感じてるの?」「別に」。これって精神的に死んでいくプロセスですよ。喜びも感じない。悲しみも感じない。興奮も感動もしない。涙もこぼれない。大声で笑うこともない。精神的に硬く、冷たくなると、だんだんそうなっていく。

5 パウロの陥った死の状況

それではパウロは、実際どういう死の状況に陥ったかということ、ここに書いてあるように内面の分裂です。大混乱。私は善を行いたいと思うのに、それを行うことができない。何が悪かは知っているけれど、やっつけない悪、やりたくない悪を行ってしまう。このような分裂状態になって、ついには、「私は本当にみじめな人間です」と絶望を経験することになった。

パウロという人物は優秀で、天才中の天才です。よきパリサイ派の家庭に育てられて、裕福なローマ市民だった。父親は彼を勉強させるためにタルソからエルサレムに送り出し、エルサレムの大学では当時随一の教師、ガマリエルの門下生になって律法を学びました。

経歴について、パウロは「私には頼むところがある」と言っています。8日目の割礼を受け、イスラエル民族、契約の民に属する者である。エリートであるベニヤミン族の出身。ヘブル人の中のヘブル人。当時の多くのユダヤ人はヘブル語を話せなくなってしまったのですが、パウロはギリシャ文化で育ったにもかかわらず、きちんとヘブル語を読み書きできたのです。そして律法については落ち度のない者。熱心については教会を迫害するほどだった。彼の肩書、エリートコースをどんどん進んでいった姿が見えます。彼は「クリスチャンを捕えたいのです」と言って、大祭司から迫害を公認する文書をもって迫害した。公の文書もらうほど、地位が高かったのです。

ところが、外側が立派であり、整えられるのに反比例するように、彼の中身はごちゃごちゃになって、整理がつかなくなってしまった。そして、私は死んだと彼は言っているのです。

では、実際パウロはどのような問題を持ったのかということが7節から書いてあります。「私は」「私は」と書いてあるので、自分のあかしをしているのですね。「それでは、どうということになりますか。律法は罪なのでしょう。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、『むさぼってはならない。』と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。」

ここでパウロは、自分の問題は「むさぼり」だと言っています。十戒の第一の戒めは、唯一まことの神を礼拝しなければいけない。その点、パウロは全然問題なかった。偶像をつくってはいけない。問題なかった。主の御名をみだりに唱えてはいけない。問題なかった。安息日を守るように。問題なかった。父母を敬いなさい。問題ない。盗んではいけない。問題ない。殺してはいけない。姦淫してはいけない。偽証をたててはいけない。これらについて、パウロは全然問題なかった。幼いころから問題なく守ってきたのです。

ところが、十番目の戒め、むさぼってははいけない。隣の人のものを欲しがってははいけない。これにひっかかる。

むさぼってははいけないというのは、どちらかというと行動より精神的な戒めだと思います。隣の妻を欲しがってははいけない。隣の家を欲しがってははいけない。隣の家具を欲しがってははいけない。隣のしもべを欲しがってははいけない。隣の家の家畜を欲しがってははいけない。

パウロにとって、これが問題でした。彼の中には、この律法を意識する前から「むさぼり」という罪があったのですが、よい具合に彼のうちで寝てくれていたのです。むさぼりがなかったのではありませんが、ぼーっとして、あるかないかわからないような状態でした。ところが、「むさぼるな」というおきてが来た時に、寝ていたむさぼりがパッチリと目覚めた。

それから、彼の中にむさぼりが起こって来た。「罪はこの戒めによって機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。

私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。」
私の中に眠っていたその罪が生き生きとしてむさぼるようになった。

6. パウロのむさぼりとは

しかし、パウロのことを勉強していると、彼が本当に他人のものが欲しかったのかという
とそういう気配というのは感じられないのですね。物が欲しかったとは思えない。パウ
ロは性的なことでむさぼったのか。いえ、女性と一緒にいたいとは思わなかった。彼は独
身の賜物を持っていて、性欲をむさぼることはなかったのです。

聖書を調べて、パウロのむさぼりが何だったのかと考えると、「自分が一番正しい」、
これがパウロのむさぼりだったと思います。「自分が正しい」なら、当然「あなたは間違
っている」。自分は律法をきちんと、誰よりも熱心に行っているということで、正しいと
思っていますから、どうしても、あなたは間違っているとなるパターンになります。

それがパウロの人生に色々な混乱を引き起こしました。

第一番目は、自分は正しくて、クリスチャンは間違っている。「クリスチャンは律法を
守っていないじゃないか。律法を守っていないユダヤ人は赦せない。クリスチャンは律法
を滅茶苦茶にしてしまう。私は神のために、このすばらしい律法のために、クリスチャン
を迫害するのだ」と言って、クリスチャンを捕えては牢に入れ、ある者は殺したというの
です。

「なぜ?」「だって、私が正しいんだもん。クリスチャンは間違っているに決まってい
る。私は正しいから、何をしてもいい。殺してもいい」。律法主義って、本当に恐ろしい
ですね。

もう一つ、パウロの問題は「自分が一番である」ということです。これもパウロのむさ
ぼりです。二番目になるのは絶対に許せない。一番上でなければ気が済まない。全部Aじ
ゃないと気が済まない。Aじゃないくらいなら、死んだ方がましだ。

そう考える人って本当にいるんですよ。「でも、すばらしいじゃないですか、平野先生。
全部がAじゃなければ死んだ方がましくらいに努力して、すばらしいと思わないんです
か?」「いやあ、Cが一つか二つあった方がいいんじゃない?」というのが私の考え方
です。弱点や欠点があった方がいいと思うのです。全部Aで、学校で番でないと生きてい
けないみたいな人がいますが、どうでしょうか。

パウロは、「私は罪人の頭です」と言ったのですから、すごく謙遜だと言う人がありま
す。でも、私はそうではないのではないかと思うのです。罪人でもいいから、罪人の頭
になりたい。二番は嫌だ。トップじゃないと。罪人の中でも私は頭だ。お前は二番め、三番
目だということではないかと思うのです。

頭になりたい。一番になりたい。誰よりも正しく、誰よりも律法を行いたい。そうい
うことがクリスチャンになってからも継続してしまうのです。私たちが律法的な生き方をし

ていると、これははがれないですよ。なかなかはがれません。クリスチャンになった後でも。

7. むさぼりの結果

大きな問題は、バルナバとの論争であり、決別でした。教会史の中で、バルナバとパウロほど強力なコンビネーションはなかった。二人で世界初の世界宣教を行って、大成功だったのです。暫くしてから、パウロが「また世界宣教に行こうよ」「いいよ、私もそう思った」と準備をしていた。パウロは、「なんか様子がおかしいな。マルコがちょこちょこしているけど、何だろう」と思って、「バルナバさん、あのマルコ連れてくの?」「そうだよ」「だめだめ、連れていけないよ。第一回宣教旅行の途中で、ずらかってしまっただよ。あんな男は二度と連れていけない」バルナバは、「そんなこと言わないで、連れて行こうよ。かわいそうじゃないか。大失敗したて、恥ずかしいと思っているんだよ。今回はきちっとやるって言ってるんだから、挽回のチャンスをあげようよ」「また途中でずらかったら、どうすんだ」「若いんだから、そんなことが二回や三回あったっていいじゃないか。」パウロは「絶対にだめだ」と言い始めてしまう。この問題は、教会全体を巻き込んで分裂させてしまったのです。ついに、最高の友情関係であるバルナバと自分が決別してしまうのです。マルコを連れて行くか、いかないかということで、です。

パウロは自分で正しいと思ったり、主張し始めると、絶対に引かない。どうにもならない。後に引かない。引けない。そういうところがあった。これがパウロのむさぼりです。

後になって、彼はどんなに後悔したかなと思います。パウロが誰からも信用されず、クリスチャンになったことを誰も信じてくれないで、使徒たちから拒絶されていた時に、バルナバだけはパウロを信じて、話を聞き、使徒たちに説明してくれた。バルナバだけだ。また、パウロがタルソで鳴かず飛ばずの伝道をしていた時に、アンテオケに招いて、伝道のチャンスを与えてくれたのはバルナバだった。アンテオケ教会は、バルナバが主任牧師なんです。主任牧師がマルコを連れて行くと言うなら、それでいいじゃないかと思うのですが、パウロは絶対だめと言い張って、バルナバはマルコを連れてキプロスに宣教に行き、パウロはシラスと行動するようになり、教会全体を巻き込んで決別してしまった。

どちらが正しいかは、その後の歴史が説明してくれます。あの時、バルナバがマルコを連れて行かなかったら、私達はマルコの福音書を持っていなかったでしょう。大失敗して、パウロが「赦せない。2度と絶対チャンスを与えない」と言ったあのマルコが、マルコの福音書を書くようになるのです。

しかし、パウロはマルコとの人間関係も、バルナバとの人間関係も悪くなったでしょう。教会には以前のような一致がなかったでしょう。喜びがなかったでしょう。自分が正しいと言い張ったからです。

またガラテヤにおいては、パウロがペテロ先生を面前でなじった。「自分は正しい。ペテロは間違っている」。本当にそうなのかなと、私は思うのです。ペテロにはペテロの考え方があったかもしれない。ペテロはこの方がいいと考えて行動したと思うのです。しか

し、「俺のやり方をやらないあのペテロは赦せない。ペテロは間違っている」。これがパウロのむさぼりであり、こういう精神状態からなかなか解放されなかったようでもあります。

幼いころから律法主義に完全に浸ってきたわけですから、それから脱却するには長い時間がかかったのでしょう。

8. 律法からの解放

私がカリフォルニアで伝道していた時に、テネシーから一人の女性が、夫と一人の男子の子を連れて教会に来始めました。リンダという女性で、英語では美しい人を見るとノックアウトされるという表現をします。そういう表現がぴったりするような美しい女性でした。南部の名門校であるバンダービルド大学。バンダービルドというのは、事業に大成功した人で、今でも15ドルくらい払うと御殿のようなバンダービルドの邸宅を見る事ができます。飾られている絵一枚とっても何億円もするのですが、それを市にプレゼントして、市がそれを経営しています。その彼が設立した南部の中で名門中の名門の大学ですが、リンダはその大学でMBA (Master of Business Administration) を取った。

アメリカで成功への一番近道は、MBAを取ることです。たとえば、メジャーリーグベースボールには、監督よりも偉い人がいて、general manager と言います。日本でもいくつかのチームはジェネラルマネージャー方式を用いています。アメリカのベースボールの監督は、野球を教えない。バッティングやピッチングを教えることを一切しないのです。

ヒルマン監督がそうですね。自分でメジャーベースボールなんかしたことがなかった。彼は偉大な監督（マネージャー）で日本ハムを成功させましたが、一軍に出たことがないので。

でもたとえば、来年は松井を取るか、出すかというようなことは、監督ではなく、ジェネラルマネージャー というのがいて、監督を雇ったり、首にしたりする。野球をしたことのない人がたくさんいますが、全員がハーバードとか、スタンフォードとか、イエール大学のMBAを持つてる。それでジェネラルマネージャーとして君臨しているんですね。

この女性はバンダービルド大学のMBAを持っていました。そして「平野先生、カウンセリングしていただきたいのですが」、ということでした。「どうしたの?」と聞くと、「私はもう、不幸なんです。劣等感でいっぱいです。」ぎょっとする。あなたのように美しくて、あなたのような学位を持っていたら、自分はインテリであるという証明書を持っているわけですから、立派なクリスチャンの男性と結婚して、家族を持って、劣等感を持つ事はできないと思うのですが、「私は本当にみじめなんです」というのです。

話を聞いてみると、「私は通っていた教会で一人のハンサムな男性と会いました。デートしているうちに彼が結婚を申し込んだので、結婚しました。多くの人々が、本当に素晴らしいご主人ね。よく仕事をされるわね。そして教会に熱心だ。教会の集会には日曜日も水曜日もきっちり出席する。

子どもが生まれる前までは朝のデボーションを夫婦でしていたのですが、子どもができてから、なかなかそれがうまくいかなくなった。夫はちくちくと『どうして私と一緒にデボーションしないんだ、きちっとしなければいけないじゃないか』と言うのです。

彼が仕事から帰ってくると、『草がちょっと伸びてる。ちゃんと刈っておいてくれよ。近所の人はどう思うかね』家の中に入ると『散らかってる』『30分前まではきれいだったんです。夕食の支度をしているうちに子どもがまた散らかしたんです』『ダメじゃないか。私が帰って来る時にはきれいになっていなければいけない』『わかりました』食事の時間になると、『ちょっとこの塩味、きついな、しょっぱすぎるよ』『ごめんなさい。あしたは気をつけます』そして次の日は『塩味が効いてないじゃないか。味の無いものなんか食べられないよ』こういう感じなのです。」

夫の言うことを一つ一つ考えると、全部その通りなのです。確かに草は伸びていた。植木の手入れはしていない。窓には子どもの指紋がついているし、部屋は散らかっている。しょっぱすぎるとその通りだと思うし、塩味が効いてないと言われると、本当にそうだし。そういう中で料理は嫌いじゃなかったのに、「いやだな」と思うようになる。この夫と生活すると、一緒に食事をしていても緊張していて、会話がはずまない。面白い話は一切ないし、食事をしながら笑ったりすることもない。心が温まるような慰めもないし、いつ批判されるんだろうという緊張の中にいる。このような夫の前に、毎日毎日失敗している。「よくやっているね」と褒められたことがない。自信喪失してしまった。

ところが、隣にある男性が生活していて、その男性が「奥さん、」と声を掛けてくれた。「今、私の芝を刈ったところです。お宅の芝も刈らせてもらえませんか。私、こういうこと、好きなんです。10分くらいでできちゃいますから。ついでに、植木にはさみも入れておきますよ。」「いいんですか?」「ええ、喜んでやります」お仕事が終わって、「ありがとうございます。そう言えば、きのうつくったケーキがあるから、でも夫はおいしくないと言ったけど、一緒にお茶飲みませんか?失敗作ですが、食べて頂けませんか?」と言うと、「ありがとうございます。おいしいですね、このケーキ」「え?」そして、「あ、指紋がついています。私、これ拭いておきます」という感じです。

そうこうしているうちに、「今日、パイをつくったんですけど、一緒に食べてくれますか?」「おいしいパイですね」という感じですね。そして、お茶を飲んでもパイを食べても会話は弾むし、笑い声は起こるし、自分の心が自由になっていく。緊張感がない。混乱がない。そうこうしているうちに、彼女は、「このような男性と結婚できたら、生活できたら、幸福だろうな」と思い始めた。結婚できたら、どんなにすばらしいことか。どうしたら、いいのだろう。今の夫と離婚しなければいけないけれど、クリスチャンだから絶対に離婚しない。夫は離婚は絶対できないと思っているだろうし、こんな恥ずかしい事はないと彼女も思う。

それで、離婚しないとすれば、「ああ、そうだ。夫が死ねばいいのだ」と思った。でも夫は自己管理が徹底していて、朝は早く起きる。夜は早く寝る。運動をきちっとしている。

冬になっても風邪ひとつひかない。夫が若死にすることなんかありえない。離婚もできないし、夫は死んでくれないし。

9. 律法に対して死ぬなら解放されます

ここにおいて、パウロはものすごい発想の転換を私たちに与えているのです。7章1節から読んでいきます。「それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。」

そうですね、結婚したということは、契約関係に入って、籍を入れて、夫が生きている間は、契約あるいは律法によって拘束されている。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。だから、姦淫をしてはいけないとか、ボーイフレンドはつくってはいけないとか。夫が死ねば、ボーイフレンドと結婚しようと自由なわけですね。ところが、夫が死んでくれないわけですから。

「ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。」でも、夫が死なない時、どうするの？という問題がリンダの問題です。夫は死にそうもない。

パウロはここで、「リンダ、あなたが死ねばいいんだよ」と言うのです。「夫は死なないのだから、あなたが死ねばこの結婚の契約から解放されるんだ。」「でも、死んだら、この隣の人と結婚できないじゃない？」とリンダは言うでしょうけれど。

ここにおいて、パウロは霊的な説明、霊的な展開をしているのです。私はキリストとともに十字架につけられて、キリストとともに死んで、キリストとともに葬られて、キリストとともによみがえったのだ。私は死んだのだ。律法に対して死んだのだ。律法との関係から私は死んだのだ。今や、新しい夫との関係、それはイエス・キリストとの関係なのだと言っているのです。

ですから、4節「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方、キリストと結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」

律法の行いによって、どんなものが死んだのでしょうか。私は正しい、私は間違いない、私は立派にやっている、それが彼の心に混乱をもたらし、それがクリスチャンをさばき、クリスチャンを死に至らせ、それがバルナバという優しい人と決別や問題や起こさせていたのです。律法に熱心であることが、うまくいかない結果を招いた。熱心にやっていることが、死のために実を結んでいた。しかし、今や新しいイエス・キリストと結ばれて、神のために実を結ぶようになったのだとパウロは言っているのです。

8節「しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。」

私はこれと同じ話を、オリーブの里の聖会でお話ししました。金曜日の夜でした。次の朝になって、多くの方が私のところに来て「あのカップルはどうなったんですか。リンダさんどうなったんですか。昨日の夜、眠れませんでした」と大変心配されました。

「しまった」、と思いました。リンダさんとお会いして、そういう話があったことは本当なんです。きっかけはリンダさんでしたが、あとは私の作り話です。皆さんは心配しないようにお話しておきます。聖書にも、芝を刈ったとか、パイを食べたというような話は載っていません。

でも、ここに書いてあることは、恐らくそういうことだと思うのです。律法主義から解放されることを説明するために、そういう話をしたらわかりやすいかなと、創り話をしてしまいました。イエス様も放蕩息子とかつくり話をしたのですから。しかし、基本的に、この話のオリジナルは聖書です。聖書にはそういうことが書いてあるのだと思います。

律法につながれていること、自分は正しい、自分は一番だ、自分は間違っていないという感覚で生きる事は、怖いことですね。でも、後になって、パウロは円熟します。仲たがいし、決別したマルコを、パウロは「私の同労者で、彼はあてになる人間だ」と言うようになった。

テモテへの手紙で、エペソにいるマルコに、「早く、私の所に来て欲しい。そして私の持っている羊皮紙の書きものと私の上着をマルコに運ばせて欲しい。マルコに会いたい」と言ってるんです。エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモン書を読むと、パウロがどんなに円熟したかわかります。全く律法から解放されて、自分は正しいと言うパターンから自由になって、愛にあふれた人になりました。「このようにして、永遠に残るのは三つです。信仰と、希望と、愛です、そのうち、最も大切なのは、愛です。」「愛とは、寛容であり、愛は情け深い、親切です」。考え方が随分変わりました。今までは、自分は正しいんだ、と思っていた。今は、「自分は寛容なんだろうか。親切なんだろうか」と自問するようになって、素晴らしいパウロの姿を見る事が出来ます。

10. 御霊によって生きよう

ところで、新しい夫と結婚して、おいしいものを食べながら、楽しい夫婦の会話をしていく。そこに、「しょっぱすぎるよ、これ」って声が聞こえてくるんですね。「ええ？」と隣を見ると、前の夫がひょっこり座ってしゃべっている。実は前の夫はそこに座っていないのです。せつかく新しい夫と結婚して、前の夫はそこにいないのに、それにもかかわらず、私達には律法の声が聞こえてきてしまう。彼のを聞くと、自信を失い、みじめになってしまいます。劣等感を持つし、人をさばくし、批判的になる。自己弁護する。

私たちはクリスチャンになったけれど、この律法の声が聞こえてくる。聞いてしまう。それはそうでしょう。何十年間も、この声を聞いてきたのですから。しかし私たちには新

しい御霊によって仕える生き方があるのです。「自分は正しい」と言うより、人を助けること、人の役に立つことを追求する生き方です。イエス様が御霊に与えたニックネームは「アロスパラクレートス」でした。この聖書では、いつもあなたとともにいる「助け主」と訳されている。御霊が住んでいると「助けたい」と言う気持ちが起こってくるようですね。

11. 本当にみじめな人間に

最後に、パウロはここで「本当にみじめな人間」と言っています。確かある湖だったと思います。中学生のキャンプがあって、一人の中学生がおぼれ始めた。ライフガードはそこに立って、ただじっと見つめているのです。回りの人たちが「早く助けてあげなよ。あんなにもがいて、バタバタして、苦しんでいるじゃないですか」ところ、ライフガードはじっと彼を見つめているだけです。人々はハラハラ、ドキドキしている。ある瞬間になって、彼は水の中に飛び込んで、あっという間に助け出して、湖から救ったのです。

回りの人たちは、「どうしてもっと早く助けてあげないんだ、死ぬところじゃなかったですか」と非難しましたが、ライフガードは説明しました。「あのようにバタバタ暴れている間は危険なんです。助けに行けば、彼はしがみつくとでしょう。ああいう状態でしがみついたら、普通の力の5倍くらいの力でしがみついて、どんなに振り払おうとしても、振り払うことができないのです。私も一緒に湖に沈んでしまいます。バタバタしている時に助ける事はできません」と言ったのです。

バタバタしているというのは、律法主義的で、何とか自分で正しく生きようとしている状態です。パウロはそうでした。外側は立派にふるまっても、内面は混乱して、分裂して、何とかしようとバタバタしていただけです。しかし、「ああ、私は何というみじめな人間だろう」と言った次の瞬間に、「主イエス・キリストによって神に感謝する」という救いが訪れるのです。神様はバタバタしている時に私たちを救おうとしません。「自分で何とかする、何とかできる、何とかします」と言う時には、神は救わないのです。私たちが「宜しく願います。救ってください」と言わないと救わない。「私にはどうする事もできません。神様、お救いください」と言ったその瞬間に、救い主の手が伸びてきて、私たちを救ってくださるのですね。

愛する天のお父様、このように私たちにあなたの十全な救いを与えてくださることを感謝します。私たちは律法を持たない民ですが、しかしそれなりに日本における律法的なものを持っていると思います。どうか、私たちが、神を信じる事、神にゆだねること、御霊をいただく事、御霊の力によって生きる事を、少しずつでも実践することができるように、自分は正しいと言い張るのではなく、寛容な気持ちを持つ事ができるように、親切な気持ちを持つ事が出来るように、愛はねたまない、愛は高ぶらない、愛は自分の利益を求めず、他の人の利益を求めるのだ、愛はすべてを信じ、すべてを望み、愛は決して耐えることが

ないというこの愛、御霊によってこの愛を実践する事ができるように、主よ、助けてください。感謝します。このようにして、みことばを学んでいる一人一人の上に、御霊様が豊かな助けを与えてくださいますように、イエス様のお名前によって、感謝して祈ります。
アーメン